

伝統文化の担い手に関する文化人類学的考察

著者	上之郷 奈穂, 李 仁子, 林 義捷
雑誌名	東北大学大学院教育学研究科研究年報
巻	67
号	1
ページ	53-63
発行年	2018-12-27
URL	http://hdl.handle.net/10097/00124262

伝統文化の担い手に関する文化人類学的考察

上之郷 奈 穂*
李 仁 子**
林 義 捷***

本稿では、伝統文化がどのような形で継承されていくのかを、文化人類学的視点から考察を試みる。千葉県東庄町笹川地区を例に、相撲文化の在り方を探るべくフィールドワークを行った。笹川地区では地区の祭りである秋季大祭で奉納相撲が行われ、また出羽海部屋の合宿地も行われている。

笹川地区の祭りの特徴は2つ挙げられる。1つは、7つの区が当番制で祭りを運営しているという点であり、もう1つは、地区ごとに祭りの運営の在り方が微妙に異なっているという点である。また、秋季大祭の奉納相撲には昭和初期から日本相撲協会所属の力士たちが参加してきた記録が残っており、相撲部屋が介入しやすい素地があったことがうかがえる。この特徴により、それぞれの当番区に合うような祭りになるよう変化させていながら、祭りそのものを継承していくことが可能になったという分析に至った。

キーワード：伝統文化, 継承, 相撲, 文化変容

1. 問題の所在

伝統文化の継承に関する研究は数多くあり、中でもE・ホブズボウム『創られた伝統』が著名な文献である。そこでは「伝統」は、特に近年における社会の文脈の中で意図的に創り出されているという見方を提示した。本稿ではこの「伝統が作り出される」という視点に立ち、日本における相撲文化の継承がどのようにしてなされているかについて、千葉県東庄町にある笹川地区を例に考察を試みる。相撲は一般的に日本の伝統文化とされているが、一口に相撲と言ってもさまざまな相撲文化の在り方がある。日本相撲協会を母体とする大相撲、全国の神社で祭礼として行われる相撲、スポーツとしての相撲などが挙げられる。これらは同じ「相撲」ではあるが、その性質は異なり、それぞれ異なる場面で行われている。本稿では祭礼として奉納相撲が行われている地域と、その地域で合宿を行うようになった相撲部屋との関わり方の在り方に着目する。笹川で相撲部屋の合宿が行われるようになったプロセスや、同じ笹川で行われる地域のお祭りとしての相撲文化と相撲部屋の合宿開催

*教育学研究科 博士課程後期
**教育学研究科 准教授
***教育学研究科 博士課程前期

地としての相撲文化がどう関係しているかに触れ、笹川における相撲文化の在り方やその継承について考察する。

その考察において、山田の研究は参照に値する。山田(2016)は、祭礼労働には2つのケースがあるとしている。第1のケースは町内の住民自らが祭礼労働を提供し、資金提供も行っているケースで、労働も消費も同時に共同で行われている。第2のケースでは町外からの参加者が無償もしくは有償で労働の提供を行うケースである。町内住居者の減少により、町の外からも祭り好きの縁故者の参加の増加が見られる。これを笹川の相撲に置き換えてみると、第1のケースが秋季大祭にあたり、第2のケースが笹川出羽海部屋合宿にあたると思われる。このような眼差しから伝統文化の創られるプロセスを明らかにしていくことを目指す。

2. 研究の概要

本稿は執筆者である上之郷、李、林は、伝統文化がどのように変容していくのかを考察していく。伝統文化がどのように継承されていくかを文献調査により事例ごとの特徴を見出していく一方、出羽海部屋の夏合宿が行われている千葉県東庄町笹川地区でのフィールドワークを行い、笹川における相撲文化の継承に関して分析を行った。

筆者はこれまでも相撲部屋の研究を行っており、相撲部屋の活動拠点となる土地で、相撲部屋はその土地の人々とどのような関係を築き上げていくのかということに着目した。相撲部屋の活動拠点は、両国を中心として点在している相撲部屋のほか、地方場所の開催地となる大阪、名古屋、福岡に宿舎を築いている。また部屋によっては合宿を行うため、合宿地に宿舎を築いている。このように全国的に展開される相撲部屋の活動拠点であるが、地方に点在している宿舎は地方場所の開催期間もしくは合宿期間中のみ宿舎としての機能を果たす。それぞれの地方拠点において、相撲部屋の宿舎は地域でどのようにして受け入れられているのか、その在り方を研究してきた。本稿の位置づけは、出羽海部屋の笹川合宿に着目し、そこでの受け入れの在り方を笹川地区でもともと行われていた奉納相撲に注目し掘り下げるとともに、笹川地区での相撲文化の在り方を合宿を行っている相撲部屋との関係に触れながら考察することにある。

3. 祭礼としての相撲

(1)世界祭礼と相撲

相撲と呼ばれる競技は日本にとどまらず世界各地にみられ、宗教的意味合いが込められたものも多数認められる。相撲は、寒川(1995)が述べるように「優劣を判断する文化装置」としての側面があるほか、葬礼相撲や、豊穰を祈願しての相撲のほか、狩猟儀礼、子どもの誕生、新年祭、割礼、客人歓迎といった儀礼に用いられる。以下、様々な場面で用いられる相撲に関して言及していく。

同じく寒川(1995)によると、南アフリカの南部に位置するフエゴ島のヤーガン族やスーダン共和国のヌバ山地に住むヌバ族においては、勝利が男の権威を高めるのみならず、とくに未婚男子にとっては望ましい結婚条件とみなされている。

相撲そのものの宗教性,あるいは相撲が宗教的儀式の一部に組み込まれている状況は,多くの民族において指摘することができる。南米のカマユラ族,アフリカのヤウンデ族などの民族は,相撲に女が出場する。女の相撲参加がトライブ段階から始まることは,ことによると農耕の開始と関係がある。それは豊穰観念との関わりである。

かつてモイリは,中央アジアの騎馬遊牧民文化に相撲を含めた葬礼競技文化を想定し,それが西南に下って古代ギリシアのオリンピックを生み,南東へは東南アジア大陸を介入してポリネシアに入り,さらに東アジアへもと,葬礼競技(葬礼相撲)が伝播していく仮説を提出したことがあった。

葬礼や豊穰との関わり以外に相撲は,これを行う民族ごとに実に多様な宗教的行為と結びあっている。北極圏に住むコパー・エスキモーでは狩の成功を祝う狩猟礼として,また拡大なオセアニアでは,子供の誕生,新年祭,割礼,客人歓迎,部族祖先祭に際して相撲がとられる。

台湾のサイシャット族では紛争解決のために神明裁判として相撲が行われる。これには,勝利は神あるいは超自然的存在が正者に与える加護の証とみなす考えが前提にある。

フィリピンの相撲は,宗教的な文脈の中で行われてきたものである。ボントック族の人々が信仰しているアニト霊の存在があり,ウン・ウノングの競技は紛争を解決する手段として機能している。

(2)日本における祭礼相撲

相撲の祭礼は日本においても各地に見られるが,その数や規模は年々縮小していていると考えられる。下谷内(1995)は石川県加賀地方における相撲行事について,第二次世界大戦を境に衰退していったとしている。つまり,祭りの担い手となる若者が戦争に駆り出され若者の数が減少したことが影響している。また,戦後の高度経済成長期による生活様式の変化から,娯楽として機能していた相撲が廃れていったとしている。大久保・吉野(1993)も能登地方における伝承相撲が戦後を境に減少したとしている。

現代の日本では少子高齢化や過疎化が進んでることから祭礼そのものの後継者が不足していたり,生活様式の変化から相撲が娯楽として行われなくなったりするなど,祭礼としての相撲行事は衰退してきていることが読みとれる。日本での祭礼行事としての相撲は神社で行われることが多い。その理由の1つが,相撲を行うための土俵が神社にあるということが挙げられる。

相撲祭礼の歴史に遡ると,滝沢(1977)によれば,中世の相撲を代表するものは神事相撲であり,全国的に行われたものと考えられる。神亀2年(725)諸国は干害のため凶作となり,庶民が困窮したので,聖武天皇は伊勢大廟をはじめ21社に勅使を派遣し,神明加護を祈願されたところ,翌神亀3年は諸国豊作となり,これに感謝して諸国の神社に幣帛を献じ,神前において相撲を奉納したことが記録されており,神事相撲の始まりとも伝えられている。

相撲節の儀礼を踏襲し,神社祭祀の儀式中にとりいれられたものであり,その後舞楽,流鏝馬,競馬とともに祭事として行われ,その内容としてはオリンピアフリカの祭典における競技の如く,奉納の意味もあり,同時にその技能のデモンストレーションでもあり,武人にとっては戦場組討の練習にもなったことと考えられる。

現在も各地で古くから伝わっている神事相撲は数多くあるが、今なお盛況なのは「塩なし、水なし、待たなし」で有名な能登の唐戸山神事相撲が代表的なものである。羽咋神社(石川県羽咋市)は垂仁天皇の皇子石衝別命を祭神とし、命が相撲を好まれたので北陸七州の力士が毎年9月25日に近くの唐戸山(相撲場)に集まり、相撲を奉納して神霊を慰さめたのがその由来で、千余年の久しきにわたり続けられている。その他にも、以下のような相撲が全国的に行われている。

- 香取神社(千葉県香取郡香取町)
10月28日神事相撲
- 鹿島神社(茨城県鹿島町)
9月9日大宮祭, 現在子供相撲
- 諏訪神社(長野県諏訪市)
4月15日神事相撲
- 三上神社(滋賀県野州町)
10月14日芝原相撲
- 右田陶器神社(佐賀県西松浦郡有田町)
11月15日宮相撲
- 太宰府神社(福岡県筑紫郡太宰府町)
8月31日注連打相撲
- 早岐神社(佐世保市早岐町)
9月19日宮相撲
- 竜野神社(兵庫県竜野市)
4月17・18日奉納相撲

以上の他にも各地で多くの神事相撲が存続するが、昔のままの形態を残すことは難しく、子供相撲などをもって代えている場合が多いようである。

西村(2016)も相撲では、勝負を争う競技が祝祭において重要な地位を占めることは多いとしている。競技とりわけ肉体がぶつかり合う身体文化はその暴力性や攻撃性を通して集団的熱狂をもたらしやすい。祝祭においては、観客は見ることを通じて主体的に能動的に行動する者であり、この競技者・観客ともに主役であるというのが、特徴である。戦前の大相撲では観客は土俵上にまで上がって、力士に飛びついたり、すがったりして、全身でからみついたのである。こういった「祝祭」装置は大東亜戦争を経るなかで「儀式」の文化的装置に取って代わられる。そのなかで公正な勝負の論理が貫かれるスポーツ化が進んでいった。

4. 当番制による祭りの継承

調査地となる笹川であるが、この地は現在でも相撲が祭礼として行われている。笹川は千葉県の北東部に位置する地域であり、近くを利根川が流れている。東京からは電車で2時間強の距離である。この笹川地区では夏になると相撲がとても盛り上がる。7月には地区のお祭りである秋季大祭があ

りそこでは奉納相撲が行われ、8月になると出羽海部屋が笹川で合宿を行うからである。しかし、秋季大祭を運営する組織と、出羽海部屋の合宿を運営する組織は異なっている。この笹川地区において、相撲という文化がどのように継承されているのか、また、母体組織の異なる両者がどのように関係しあっているかを明らかにする。

(1)「新しい」祭り

笹川で行われる催事は主に2つ挙げられ、1つは春に行われる神楽、もう1つは夏に行われる秋季大祭である。この2つの祭礼はどちらも笹川地区にある諏訪神社で行われる。また、祭りの運営は当番区によって行われる。笹川には寝方区、仲内区、大木戸区、宿浜区、新田区、菰敷区、鹿野戸区の7つの地区がある⁽¹⁾。表1のように、7つの地区の人口には差があり、大木戸区は世帯数、人口ともに一番多くなっている。

表1 笹川地区における7つの区の世帯数と人口(平成30年4月1日現在)⁽²⁾

地区名	世帯数	人口
根方	103	271
仲内	161	462
大木戸	638	1697
宿浜	307	849
新田	101	254
菰敷	202	575
鹿野戸	210	597

また、区に入るかどうかの判断は各自にゆだねられるが、菰敷区に限っては、区内に家を建てたら区に入らないといけないという決まりがある。この7つの地区が当番制で祭りの担当を担っており、1年毎に祭りの担当の区が変わる。ここで特筆すべきは、区長の任期は1年であり、祭りの当番区が回ってきた際に区長を務めた者は、再び当番区が回ってきた際に区長をすることはないという点である。つまり、毎回祭りの経験がない(区長として祭りを運営した経験のない)者が区長として祭りを運営していかなければならない。祭りを指揮する人物は毎回変わるということになり、しかも同じ区が連続して祭りの担当区になることはない。このような意味で毎回の祭りが「新しい」祭りとなるのである。また、同じ年における神楽と秋季大祭の当番区は異なっており、秋季大祭の当番区の2年後に神楽の当番区が回ってくるというシステムになっている。2018年の秋季大祭の当番区は仲内地区であった。以下は、2018年の仲内地区の区長を務めたKさんと、諏訪神社の宮司を務めている方からの聞き取りの内容に基づいた神楽と秋季大祭の内容である。

・神楽

神楽は4月に行われる。諏訪神社内に舞台があり、そこで神楽が披露される。神楽を舞うのは当

番区となった地区の10代の若者が中心である。もし地区に若者が少なく、人数が足りなくなった場合には他の地区の人に頼む場合もある。神楽の舞の内容は地区ごとに微妙に異なっているため、神楽の舞の継承は地区ごとに行われる。舞を教えるのは当番区が回ってきた際に神楽を舞った経験がある人や、教えた経験のある人である。祭りの1、2ヶ月前から、地区の集会所で練習が行われる。祭り当日は昼頃に次の当番区への引き継ぎが行われ、神楽は夜の10時頃まで披露され、夜の部になると食べ物を放り投げるなどして、一番の盛り上がりになる。

・秋季大祭

秋季大祭は7月末に行われる。神楽と同じく諏訪神社で行われる。秋季大祭では奉納相撲が行われるが、諏訪神社内にある土俵で相撲がとられる。秋季大祭を取り仕切るはその年の当番区であるが、そのうちの奉納相撲の部分のみを取り仕切る役職があり、これを「土俵世話人」という。この土俵世話人は笹川地区に限らず、草相撲で優勝するような広い土地で横綱をはったような人格者がこの役職を引き継いできた。相撲の取り組みに際し、きわどい勝負があった場合難癖をつける者もいる。しかし土俵世話人という人物が一番の力を持ち、その場を取り仕切る。土俵世話人は代々男性がその役を担ってきた。相撲世話人は、「東庄町史」によると明治初期からの記述がある。現在の土俵世話人は「土俵管理人」という呼び名に変わり、土俵世話人でいうと第8代目にあたる。現在の土俵管理人である A さんは、現笹川出羽海後援会の会長でもある。

(2)2018年の秋季大祭

平成30年の秋季大祭は仲内区が当番区であった。ここでは、仲内区を例に秋季大祭の様相を概観する。平成30年の仲内地区の区長は K さんという人物である。仲内地区が当番区だったのは7年前であるが、そのとき K さんは地区の運搬係を担当していた。祭りの運営には携わっていたものの、全体を把握する立場にはなかったため区長になってからの秋季大祭の運営はまさにゼロからの出発であった。

秋季大祭で当番区となった区が準備や当日の進行など、その年の秋季大祭の一切を仕切る。区長は毎年交代となるため、同じ秋季大祭の経験をした区長は7年前の区長ということになる。新しく祭りの担当となった区長は、同じ区内の7年前の区長から教えてもらったり、前年に担当していた別の区の人から教えてもらったりする。また仲内区の場合、仲内の集会所にこれまでの秋季大祭の資料が保管してあったため、それを参考に準備がすすめられていった。前年のうちから当番区の区長には自分が選ばれる⁽³⁾と備えていた K さんは、仲内区が当番区となる年の前年の秋季大祭で、祭りの様子を詳細に記録に収めていた。その記録をもとに、区長に就任したのちどのように祭りの準備を進めて行けばいいかを決めていった。2018年の仲内地区の場合、7年前の当番区の際に区長を務めていた人物は亡くなってしまっていたため、7年前に仲内地区がどのように準備を進めていったのかを直接把握している人物からの引き継ぎを受けられなかったり、助言を求めることができなかつたりする中で準備を進めていった。

秋季大祭ではすべての準備を当番区で担当しなければならない。祭りの日に神社のいたるところに飾り付けをするしめ縄も、準備しなければならないものの1つである。それぞれ飾る場所によってしめ縄の長さなどは異なっている。しめ縄の用意をするのに、Kさんのもとで働いている人の中に、父親がしめ縄を作るという人物がいた。そのつてを利用し、2018年の秋季大祭では、その人物に頼んでしめ縄を用意してもらったという。しめ縄専用の田を植えてあるということで、普通の稲より早く刈り取るため、青みがかった色合いをしていた。今回は区長であるKさんの知り合いにしめ縄を作る人がいたが、また当番区が変わると別の方法でしめ縄の藁を入手する必要があるということになる。また、祭りの準備や当日の運営は7年前と同じやり方ではなく、多少変更させる部分もあった。予算の都合や、高齢化が進む地区への配慮からそうした変更に踏み切った。仲内地区の場合、お祭り当日の役員の服装を和服からスーツへと変えたり、直会での食事の用意を減らしたりした。

以上のように手探り状態で準備が進められていった秋季大祭であるが、秋季大祭当日の7月28日、台風が上陸したために神事と引き継ぎのみを行い、奉納相撲は中止となってしまった。

(3)等身大の祭りの在り方

笹川の祭りの特徴として、ここでは2つの特徴を挙げたい。まずは①祭りの運営が当番区で行われていること、そして②7つある区ごとに神楽の舞など少しずつ祭りの内容が異なっていることである。当番制で祭りを運営するにあたり、当番区でない他の区は祭りに関して口出しをすることは無い。このような風習は、同じ祭りであってもそれぞれが祭りの運営の在り方を模索しやすい環境を生み出していると言えよう。少しずつ祭りの在り方を変化させながら、次の当番へと引き継いでいく。また、地区に共通する祭りの運営の取り決めに関しては、三者会議で話し合いがなされる。三者会議とは、7つの各地区の氏子総代、区長、神社委員が集まる場であり、1年に2回設けられる。このように、地区全体を通して祭りの運営の在り方を共有し、各地区がそれぞれのやり方で祭りを運営していくことで、祭りの担い手に合った、等身大の運営の在り方を創り上げることが可能になっている。

5. 笹川出羽海部屋合宿

(1)出羽海部屋と笹川の出会い

笹川で毎年行われる秋季大祭であるが、1992年の秋季大祭の当番区は、大木戸区であった。大木戸区には、出羽海部屋の力士と付き合いのあったIさんという人物がいた。Iさんは1992年の大木戸区の区長に、秋季大祭に現役力士を招待することを提案し、現役の力士が参加することとなった。Iさんは笹川の出身で中学卒業後東京に働きに出た。その後、知り合いのつてで出羽海部屋に行くようになり、そこから出羽海部屋のある力士と交流が始まった⁽⁴⁾。この時に奉納相撲に来た力士はIさんと親しくしていた力士と、まだ入門したばかりの若い力士であった。Iさんと親しくしていた力士はその後間もなく引退を迎え、親方として弟子の指導にあたった。

それと期を同じくして、静岡県御殿場で行われていた夏合宿が台風の影響を受け使えない状態になったため、笹川の諏訪神社にある土俵を使って合宿をしたらどうかという話になり、2011年より笹川での合宿が始まった。そして現在に至るまで、合宿は続いており、出羽海部屋による奉納相撲への参加も続いている。これには、奉納相撲に現役の力士が来ることにより祭りがより華やかになることが要因として推察される。

(2)合宿と大木戸区

出羽海部屋で行われる合宿は現在笹川で行われているが、合宿地はこれまでに何度か変わっている。筆者が把握しているものでは千葉県の大原から静岡県に移り、その後再び現在の千葉県へと移った。

合宿は毎年8月に2週間ほどの日程で行われる。合宿の最終日には稽古のあとイベントも行われ、赤ちゃんの土俵入りや子どもによる相撲、部屋の力士による取り組みや、関取にのみ許されている大銀杏という髪型を床山が実演してみせるなど、相撲を見に来ている人々が楽しめるような地方巡業のような内容となっている。諏訪神社内の土俵で稽古が行われ、宿舎は大木戸区の集会所と、大木戸区内の新町という部落の青年館の2か所を利用している。⁽⁵⁾合宿に際しては、笹川出羽海後援会が実行部隊として機能する。初代の笹川出羽海後援会の会長は、秋季大祭の大木戸区の区長であり、歴代の後援会長も大木戸区の者が就いている。また、宿舎として利用している2つの建物(大木戸区集会所、大木戸区新町部落の青年館)はいずれも大木戸区所有のものであり、そもそもの出羽海部屋との交流が生まれたのも大木戸区が担当していた秋季大祭から始まったことから、合宿には大木戸区の人々が積極的に関わっていることがうかがえる。合宿が18年目ともなると、後援会の役員も代替わりを迎え、かつての役員たちの中には後援会から退会する者も出てくる。しかし、個人的に親しくしている親方や力士たちとの交流を続けている者もいて、合宿期間中笹川にやって来ると食べ物をおごってやったり、お土産を渡したりしている。大木戸区の人々が中心となって行われていた合宿であったが、徐々にほかの地区の人々も参加するようになり、現在に至るまで合宿は続けられている。

(3)合宿のゆくえ

2001年に始まり、2018年で18回目の開催となった笹川での合宿であるが、当初は10年をめどに終わる予定であった。合宿を開催することのメリットとして、相撲部屋にとっては合宿期間中食費、光熱費などがかからないことがまず挙げられる。また、出羽海部屋に在籍している親方衆が交代で監督にあたるため、親方衆1人当たりの負担が軽減される。一方、合宿地である笹川にとっては、合宿開催が町おこしの機会になる。伝統文化の継承に観光化が大きな役割を果たしていることは、内田(2015)などこれまでの研究からも明らかになっている。笹川でも同様、合宿中の稽古は自由に見学ができるため、力士たちの稽古の様子を一目見ようと人々が集まってくる。特に、合宿の最終日にはイベントが開催され、赤ちゃんの土俵入りや子どもによる相撲、また弓取り式の実演などが行われる。この最終日のイベントの際には各地から多くの人が集まり、町からシャトルバスが運行さ

れるほどの人出でにぎわう。また、合宿期間に合わせて観光協会が地元の物品を販売している。

しかしその反面、合宿を開催するとなると実行委員の負担も大きい。合宿期間中の食費や光熱費や諸経費といった金銭的な負担のほか、合宿の準備や後片付け、最終日に行われるイベントの運営といった労働的な負担がある。これらの負担を考慮して期限付きでの合宿開催が行われていた。しかし、部屋たつての希望や、後援会からも続けたいという声が挙がり、存続することが決定した。金銭的な負担に関しては、町からの助成金を受けることになり、いくらか軽減されたといえる。しかし、同時に後継者問題も浮上するようになった。合宿が始まった当初は、物珍しさもあり相撲に熱を上げる地域住民も多かったが、次第に相撲取りが来るといふ光景にも慣れ、徐々にその熱が冷めて行った。また後援会の会員の高齢化が進む中、大木戸区以外、さらには笹川地区以外の役員も出てくるようになった。

歴代の会長は全て大木戸区の人物であり、現在の会長は4代目である。現在会長を務めている方はAさんという方で、秋季大祭における土俵管理人の役職も担っている。Aさんは土俵世話人ではなく土俵管理人という名前で就任した。笹川出羽海後援会に所属しており、土俵を整備した経験があるなど土俵の扱いに詳しく、就任が決まった。しかしこれまでの相撲世話人は奉納相撲の一切を任されており、力士を呼び集めたりするところからその役を担っていたが、現在では文字通り土俵の管理をする役職となった。ここで問題となるのが、Aさんへの負担の大きさである。現後援会会長でありながら、秋季大祭の土俵管理人も務めている。後援会のなかでは、会長という肩書ではあるが実質庶務も担っているのが現状である。このような現状であるにも関わらず後援会が機能していることの背景として、Aさん自身の祭りや相撲に対する強い好奇心と、かつての後援会の役員たちの存在が挙げられる。かつて役員を務めたが今は高齢のため実務部隊には所属していなくとも、合宿の運営の在り方を熟知している。そのような人物が近くにいることで、心理的な負担が軽減されると推察される。今後どのようにして笹川出羽海後援会が継承されていくのかということに関しては、今後の研究のなかで考察を試みることにする。

おわりに

笹川における祭りの文化継承の在り方には、7つの区による当番区制で祭りの運営をしている点と、同じ祭りであっても神事の進行や、飾りの配置といった祭りの内容が地区ごとに微妙に異なっているという点を特徴として述べてきた。そして、これらの特徴が、それぞれの当番区に合う形で祭りの運営を行うことを可能にしている土台となっている。この柔軟な運営の在り方があったからこそ、出羽海部屋と親交のあったIさんの紹介で笹川の奉納相撲に出羽海部屋の力士が参加することが可能になった。ここに、伝統が創られていくという営みの一端を読み取ることができる。また、笹川での秋季大祭の奉納相撲には、昭和初期頃から大相撲の力士が招待されていた過去がある(東庄町史(下巻)より)。大相撲とは異なる流れの中で相撲の文化を継承してきた笹川の奉納相撲であるが、「相撲」という共通の行為で過去に大相撲界との接点を持たれていたことが明らかになった。日本の国技とされている大相撲であるが、その歴史を紐解くと神事において相撲がなされていたこ

とがあり、その名残は現在の大相撲での所作や儀礼に読み取ることができる。この相撲における神事的な性質が、笹川の奉納相撲と大相撲界の相撲部屋との間に関係を築かせた一因となっているのではないだろうか。

笹川における相撲文化のもう1つの側面として、2001年から行われている出羽海部屋の合宿にも触れてきた。笹川合宿を運営する笹川出羽海後援会は、笹川地区を中心とした有志によって組織されている。発足当初は笹川地区の中でも特に大木戸区の人々を中心とした組織であったが、年々笹川地区以外の人も参加する組織となっている。また、現笹川出羽海後援会の会長が秋季大祭における土俵管理人ということもあり、今後の笹川出羽海後援会の活動が秋季大祭とどのようなかわりを持って行くのかは、引き続き研究を行っていきたいと考える。

【注】

- (1) この他に竜神台区(世帯数333, 人口834:平成30年4月1日現在, 東庄町ホームページ参照)もあるが、鹿野戸区と一緒に祭りの担当を担う。
- (2) 東庄町ホームページを参照のもと筆者作成。
- (3) 区長は選挙で選ばれる。区内地区の場合選挙は年末に行われる。
- (4) 「東庄町史(下巻)」によると、昭和初期に大日本相撲協会より白羽二重の大優勝旗が寄贈され、それ以降祭りの当番区が日本相撲協会に要請した場合、数名から数十名の力士が参加するようになったとしている。出羽海一門である北の湖部屋の力士がかつて奉納相撲に参加したこともあった。
- (5) 合宿が始まったばかりのころは部屋の相撲取りの数も多く、関取衆はIさんの家に寝泊まりをしていた。現在では番付が上の力士は新町の青年館, 下の力士は大木戸区の集会所で寝泊まりをしている。

【参考文献】

- 内田順子(2015)「アイヌ文化の伝承のありかたと観光 白老と二風谷の場合」『国立歴史民俗博物館研究報告 193』
E・ホブズボウム, T・レンジャー (1992)「創られた伝統」紀伊国屋書店
大久保英哲・吉野徹(1993)「スポーツ人類学からみた能登地方の伝承相撲について」『金沢大学教育学部紀要(人文科学・社会科学編) 42』
下谷内勝利(1995)「石川県加賀地方における相撲行事とその衰退」『日本体育大学紀要24-2』
寒川恒夫(1995)「相撲の人類学」大修館書店
滝沢寿雄(1977)「相撲のうつりかわり」『明治大学教養論集109』
東庄町史編さん委員会(1982)「東庄町史(下巻)」東庄町
西村秀樹(2016)「大相撲の文化性を問う」『スポーツ社会学研究24-2』
山田浩之(2016)「都市祭礼文化の継承と変容を考える」ミネルヴァ書房

【参照 URL】

東庄町「東庄町ホームページ」<https://www.town.tohnosho.chiba.jp/index.html>, (2018年9月28日アクセス)

A Study of Bearers of Traditional Culture

Naho KAMINOGO

(Graduate Student, Graduate School of Education, Tohoku University)

Lee INJA

(Associate Professor, Graduate School of Education, Tohoku University)

Lin YIJIE

(Graduate Student, Graduate School of Education, Tohoku University)

This paper how traditional culture is inherited from the perspective of anthropology. We focus on “sumo” - a examines traditional culture of Japan. In this paper, we followed the Sasagawa communities in Tonosho, Chiba Prefecture, and did field-work to find out the existence of sumo culture. It should be noted that the Sasagawa communities have the original sumo culture, including a festival and a training camp for sumo.

The Sasagawa communities have two features. First, seven areas take turns to hold the festival, and second, each area has its own essential way to hold the festival. Also according to the record, we found that the formal sumo wrestlers have participated in this autumn festival from the early Showa era, which indicates the sumo stable can be easily intervened. From this feature, we can study that it is the each essential festival-hold way of different areas that make the traditional culture inherited while changing from time to time.

Keyword : traditional culture, inherit, sumo, cultural modification.

